


カテゴリー

神経系

タイトル

大転子痛症候群：脳卒中患者の有病率と関連因子 Greater Trochanteric Pain Syndrome: Frequency and Associated Factors in Patients with Stroke  Koseoglu, BF. Top Stroke Rehabil. 2014 Sep-Oct;21(5):383-90. doi: 10.1310/tsr2105-383.

内容

なぜこの論文を読もうと思ったのか？

- ・大転子痛症候群というものを初めて聞き、興味深かったから。
- ・自分の利用者様に麻痺側の股関節痛を訴える方がおり、治療の一助になればと思ったから。

目的

- ・脳卒中患者の大転子痛症候群の有病率と関連因子を調査する。

方法

- ・入院中の脳卒中患者 86 名（男性 50 名、女性 36 名、 65.4 ± 12.7 歳、範囲 18～86 歳）

・意識レベル GCS15 未満、MMSE7 以下、脊柱・股関節・膝関節手術を受けた方やがんなどの疾患を有する方を除いた。

・関連因子として年齢、性別、BMI、損傷部位、発症してからの期間、ブルンストロームステージ、歩行能力、痙性（Ashworth scale）、認知機能（MMSE）、うつ症状、ADL、QOL、腸脛靭帯症候群の有無、腰痛の有無、股・膝関節 OA をひとりの検者が評価し、大転子痛症候群の相関をみる。

※大転子痛症候群の診断基準

①股関節外側痛

②大転子部の著しい疼痛

③股関節の回旋、内外転で疼痛

④中殿筋の痛み

⑤パトリックテスト陽性

⑥大腿外側の放散痛

①②どちらかに加え、残りの③～⑥でひとつ以上あてはまる場合、大転子痛症候群と診断される。

※腸脛靭帯症候群

・オベールテスト陽性

・膝屈伸時の大腿骨外側上顆の圧痛

結 果

- ・ 28 名の被験者に大転子痛症候群が認められた (32.6%)
- ・ 相関を示した因子は下肢の痙性 ($r=0.343, p<0.001$)、うつ症状 ($r=-0.330, p<0.02$)、腸脛靭帯症候群 ($r=0.477, p<0.01$) だった。
- ・ その他の因子は相関を示さなかった。

論文の背景や興味深かったこと

- ・ 大転子痛症候群は主に大転子付近に存在する滑液包炎が原因であると言われている (Geraci, Sanfilippo and D'Arienzo, 2011)。
- ・ 脳卒中患者の大転子痛症候群の有病率、関連因子を調べた研究は本論文が初めてで、腸脛靭帯症候群は先行研究 (Geraci, Sanfilippo and D'Arienzo, 2011) と一致していた。
- ・ 今回、下肢の痙性も相関を示しており、下肢の異常な運動パターンが滑液包に過剰な負荷を生じている可能性が示唆された。

- ・脳卒中患者の股関節痛の一因として大転子痛症候群（滑液包炎）があると知ることができた。
- この滑液包の解剖、炎症が起こるメカニズム、評価方法などを調べて臨床に活かしていきたい。

参考文献

Geraci, A., Sanfilippo, A., and D'Arienzo, M. (2011) 'Greater Trochanteric Pain Syndrome: What is this Meaning?', *Orthopedic and Muscular System*, 1(1), pp.1-4. doi: 10.4172/2161-0533.1000101.